

# 日本三不動明王

京都・青蓮院門跡＝青不動

大津・三井寺＝黄不動

高野山・不動院＝赤不動

## 天台宗と密教(台密)

天台宗は、平安時代 806 年に最澄によって比叡山(一乗止観院、後の延暦寺)に開かれました。天台宗の密教は台密といわれ、空海が開いた真言宗は東密といわれています。

天台宗でも密教は主要な柱の一つなのです。選ばれたものに対してのみ秘儀が伝授されてきた密教において、宇宙の中で仏様がどのように並んでいるかを図式で現したものを「曼荼羅(まんだら)」といいます。その曼荼羅の中心にいらっしゃるのが大日如来です。

大日如来は宇宙のすべてをつかさどる中心的な存在ということです。そして、その大日如来の化身が、不動明王なのです。

## 不動明王の存在一大日如来の化身

大日如来はあまりに崇高で直接には拝みにくいため、その化身の不動明王を拝むようになりました。不動明王は、日本では「お不動さん」の名で親しまれ、私たちにとって拝みやすく身近な存在であります。

しかし、不動明王を拝むということは大日如来、つまり、宇宙の中心に向かって拝むということになります。これは自らが中心に溶け込み、宇宙と一体になるという思想にもとづくものです。

## 不動明王を拝むという事

曼荼羅では大日如来の周りにたくさんの仏さまがとりまいていますが、お釈迦さまはそのうちの一つの仏さまであり、中心ではありません。

曼荼羅の構成は、お釈迦さまが悟りを開かれ、仏教の教えを説かれ、その弟子たちが体系化していったものです。

曼荼羅は仏様の世界、つまり仏様の宇宙観を現したものですが、その中心は大日如来であり、その化身が不動明王です。

不動明王を拝み、自らが不動明王と一体となることは、宇宙の中で本当に自分がひとかけらの存在であることに気づくことであり、同時に大きな大日如来(仏さま)の力に生かされていることに気づくことでもあります。

## 日本の三不動

京都・青蓮院門跡＝青不動＝公開

大津・三井寺＝黄不動＝非公開

高野山・不動院＝赤不動＝通常非公開・四月二十八日のみ公開

# 青不動 青色の不動明王

不動明王は、五色(青・黄・赤・白・黒)に配せられることがあり、赤不動、黄不動、目黒不動、目白不動などはその例です。

その中で青色は、方位に配せられれば中央、五大に配せられると、大日如来の三昧耶形(さんまやぎょう・仏を表す象徴物、仏さまの持物)である

五輪塔婆(ごりんとうば・地水火風空の五大をそれぞれ方形・円形・三角形・半月形・宝珠形に石などでかたどり、順に積み上げた塔)である五輪塔婆の頂上の宝珠形となる様に、

青不動は五色の不動明王の中では最上位にあり、中心にあります。

すなわち、青不動明王は「不動明王中の不動明王」という地位を占めております。

## 青蓮院の青不動

青蓮院の青不動明王は、平安時代の当初は朝廷の中でおまつりして皇室の方々に信仰されていきました。そして天台宗の選ばれた高僧の方々が青不動明王を如法に供養しご祈禱してきましたが、平安時代の末になり、永年のご祈禱の功勞として、特に皇室との縁の深かった当青蓮院に下賜されたと伝えられております。

そのようにはじめは国家の安泰や、皇室の安寧を祈願することが目的でしたので、当時の最高レベルの絵仏師によって精魂込めて描かれた礼拝画像であるといえます。それだけの思いを込めて作られた不動尊像が、平安時代より多くの高僧の手でご祈禱され、伝え引き継がれてきたという歴史的な重みもまた、青不動が国宝中の国宝といわれる所以であります。

## 青不動の力

不動明王は、迷いの世界にいる衆生をただ優しく導くだけではありません。私たちに襲いかかる諸々の災難や心を悩ませ惑わせるものに、陰しい怒りの表情(忿怒相)と、揺るぎない心(不動心)で、敢然と立ち向かいます。

もし我々が悪業をなす時には、厳しく叱りつけて正しい道に導いてくれる、いわば厳しい父親のような存在の明王さまです。青不動明王には調伏・息災(悪行や煩惱を滅し、魔障を払う)の強大な力があり、私たちの煩惱を焼き尽くし、正しい道へと導いてくださいます。

## 煩惱を焼き尽くす青不動

「自分さえ良ければ良い」という「貪り(むさぼり)の心」、すなわち「煩惱」を燃やし、その上で諸願成就を目指していきます。心の中にある悪い心は「貧怒痴(とんじんち)」という貪りと怒りと無知から生じます。そうしたものをすべて焼き尽くすのが不動明王です。

個人でも企業でも、「自分だけ良ければ」という心を捨て、得たものを積極的に社会に還元してはじめて、成就がなされていくのです。

## 青不動のご利益

- ・身に降りかかる災いをおさめ、滅する。
- ・信念を持って努力していることが報われ、道が拓ける。
- ・物事が達成される、願いが叶う。
- ・弱い心に打ち勝ち、自分の悪いところを正していく力をいただく。
- ・病やけがなど病魔に冒されたところが回復する。

## 厳かで華やかな礼拝画像

激しく燃え盛る焰(ほのお)を背にした青不動明王が、濃茶褐色の画絹に描かれた「絹本着色青不動明王二童子像」。

青不動明王の性格にふさわしい威厳と荘厳さを持つ、大変迫力のあるこの画像は、日本三不動画の一つとして平安時代からたいへん篤く信仰されてきています。

## 画面構成

中央には厳かに岩の上に鎮座した不動明王が描かれています。本尊に向かって右側には、腰を引き、上目遣いで合掌する「矜迦羅童子(こんがらどうじ)」が描かれています。

一方の左下には棒を構え力を誇示する「制叱迦童子(せいたかどうじ)」が描かれています。この二人には従順さと反抗的態度という侍者の二面性がうかがえます。

不動尊と二童子は、安定した三角形構図を築いており、ここには三者三様の性格の違いが表出されています。

## 青不動の特徴

忿怒(ふんぬ)の相で厳かに盤石の上に座する不動明王に、動きは感じられません。まさに、一切の人々を救うまではここを動かないという不動の姿をあらわしているのです。

右手に持つ三鈷剣は魔を退散させると同時に人々の煩惱を断ち切るための剣です。剣に巻き付いた俱利迦羅龍(くりからりゅう)は、不動明王の変化身で、竜王の一種とされています。

左手の羂索(けんさく)は悪を縛り上げ、煩惱から抜け出せない人々を救い上げるための縄です。

右目は天を、左目は地をそれぞれ睨み(天地眼)、眼球の両側は忿怒による充血で、目頭と目尻を赤く強調されています。

また、右上唇を噛んで牙を上方に出し、左下唇からは牙を下方に向けて出しており(牙上下出)、こちらも左右非対称に表現されています。

これらの不動明王の特徴は、九世紀末に天台宗の安然(あんねん)が「不動明王 立印儀軌修行次第 胎蔵行法(りゅういんぎしきしゅぎょうしだいたいぞうぎょうほう)」によって著された「不動明王の十九観」に基づくものです。(右表参照)

十世紀後半に活躍した絵仏師である飛鳥寺玄朝(げんちょう)の様式を伝えており、この不動十九観を忠実に再現していることが明瞭にうかがえます。つまり、この青不動像は經典儀軌の規定を忠実に踏まえた観想礼拝のための仏画であるということが理解できます。



## 青蓮院＝京都五箇室門跡

青蓮院門跡(しょうれんいんもんぜき)は、天台宗総本山比叡山延暦寺の三門跡(注1)の一つとして古くより知られ、現在は天台宗の京都五箇室門跡(注2)の一つに数えられています。

青蓮院門跡は、古くより皇室と関わり深く格式の高い門跡寺院(注3)とされています。

(注1)天台宗の三門跡寺院…青蓮院、三千院、妙法院

(注2)五箇室…青蓮院門跡、妙法院門跡、三千院門跡、曼殊院門跡、毘沙門堂門跡

(注3)門跡寺院…門主(住職)が皇室或いは摂関家(注4)によって受け継がれてきたお寺のこと。

(注4)摂関家…摂政・関白に任ぜられる家柄。藤原良房が最初に摂政となってから藤原北家が独占。鎌倉時代には近衛・九条・二条・一条・鷹司(たかつかさ)の五摂家に分かれた。門跡寺院などの堀に五本の線があるのはこの五摂家からきている。

## 青蓮院門跡の由緒

起源は伝教大師最澄による「青蓮坊」。日本天台宗の祖最澄(伝教大師)が比叡山延暦寺を開くにあたって、山頂に僧侶の住坊を幾つも作りましたが、その一つの「青蓮坊」が青蓮院の起源であると云われています。

伝教大師から円仁(えんにん、慈覚大師)、安恵(あんね)、相応等、延暦寺の法燈を継いだ著名な僧侶の住居となり、東塔の主流をなす坊でした。

## 門跡寺院としての青蓮院の始まり

平安時代末期に、青蓮坊の第十二代行玄大僧正(藤原師実の子)に鳥羽法皇が御帰依になって第七王子をその弟子とされ、院の御所に準じて京都に殿舎を造営して、青蓮院と改称せしめられたのが門跡寺院としての青蓮院の始まりであり、行玄が第一世の門主であります。

その後明治に至るまで、門主は殆ど皇族であるか、五摂家の子弟に限られていました。

## 栗田御所 仮御所としての青蓮院

江戸時代の天明八年(1788年)に、大火によって御所が炎上しました時に、後桜町上皇は青蓮院を仮御所としてご避難されました。

庭内の好文亭はその際には御学問所として御使用されたものであります。

また、青蓮院は栗田御所と呼ばれており、「青蓮院旧仮御所」として国の史跡にも指定されています。

## 青蓮院門跡の拝観

応仁の乱の際、兵火を免れず、徳川氏には豊臣氏滅亡後今の知恩院の全域を取り上げられましたが相阿弥の作と伝えられる龍心池を中心とする室町時代以来の庭園から栗田山将軍塚にわたる境内は今日まで保有され、徳川幕府も殿舎の造営には力を致して東福門院の旧殿を移して宸殿を造りました。

拝観の際は、先ず殿舎内をご参拝頂き、それから庭園をご鑑賞下さい。青蓮院の庭園は池泉回遊式庭園ですので、皆様にお歩きいただき、それぞれ色々な思いにふけていただければと思います。

## 庭園について

青蓮院の主庭は、室町時代の相阿弥の作と伝えられ、栗田山を借景にしてその山裾を利用した幽邃な趣の池泉回遊式のお庭です。龍心池の対岸南に高く石積みした滝口を中心として、東側にかけて柔らかな曲線をえがいた築山が設けられた、築山泉水庭でもあります。

## 青蓮院のご本尊

青蓮院では平安後期開創の時から「熾盛光如来曼荼羅」(しじょうこうによらいまんだら)を御本尊としておまつりしてきましたが、幾多の戦乱火災等を経て、現在の御本尊はおよそ四百年前、桃山時代に豊臣秀吉によって復元再作成され奉納されたものです。

熾盛光如来を御本尊とするお寺は、日本中で当青蓮院門跡のみです。この曼荼羅は約2メートル四方の掛け軸で、中心に熾盛光如来を表す種子(しゅじ、仏さまを表す梵字)「ボロン」が描かれた「種子曼荼羅」です。

中心の熾盛光如来は、大日如来の仏頂尊(頭の頂におられる極めて崇高な仏さま)で、偉大な仏の智慧と光を発せられています。熾盛光如来の上には、金色の一字金輪仏頂を描き、向かって時計回りに、観自在、金剛手、毘俱胝、赤色の仏眼仏母、不思議童子、文殊、救護慧の各菩薩が描かれています。その周りには熾盛光如来のお力を表した八つの月輪が描かれています。

周囲四隅には、四明王を配しています。向かって右上に金剛夜叉、右下に降三世、左下に軍荼利、左上に大威徳の各明王が描かれています。不動明王は御本尊と重なっています。

背景は、「群青」という極めて高価な青色の顔料で彩色されており、虚空(広大な宇宙)を表しています。損傷が著しかった為、平成17年(2005年)の御開帳の前に大修復を致しました。その際に色の塗り直しは一切行いませんでしたが、今も変わらぬ美しさを保っていることに驚かされました。

## 【重要】植髪堂

浄土真宗宗祖 親鸞上人が得度した所。浄土真宗門徒の聖地。

## 青蓮院青龍殿(旧大日堂)

平成26年10月、京都東山山頂に大護摩堂「青龍殿」を建立、落慶。  
青龍殿とは、奈良大仏殿のおよそ横幅半分の木造大建築物で、国宝 青不動をお祀りする建物です。青蓮院では、この国宝 青不動を初めて奥殿に安置し、精密な複製画を通じておまいりすることが可能となりました。建物内では、所定日に護摩を修し、みなさまの諸願成就を祈願させていただいております。

## 国宝・青不動を奥殿に安置

教科書にも紹介されている「青不動明王二童子像」は、ご身体の色が青黒(しょうこく)なことから通称「青不動」と呼ばれています。平安時代の中期、11世紀頃の製作とされ、我が国仏教絵画史の最高傑作の一つとして、いち早く国宝に指定されました。縦203cm、横149cmの絹本礼拝画像で、妄念や煩惱を焼き尽くす不動明王の気迫が拝する者を圧倒します。

青不動明王二童子像は、ご身体の色が青黒(しょうこく)なことから通称「青不動」と呼ばれ、日本三大不動画のひとつとして有名です。  
製作時期は平安時代の中期、11世紀に当たるとされ、我が国仏教絵画史の最高傑作の一つとして、いち早く国宝に指定されました。大きさは、縦203cm、横149cmの大作の絹本礼拝画像です。この画像は、絹本の濃茶褐色の地色に、朱と丹で激しく燃え盛り揺れ動くすさまじい炎が画かれ、その中央に剣と絹索を持ち、忿怒の相の青不動明王の尊身が厳かに岩の上に座しておられます。妄念や煩惱を焼き尽くす不動明王の気迫が拝する者を圧倒します。青蓮院では、宮中から下賜されたこの尊像を寺宝中の寺宝として、篤く敬い、尊崇してまいりました。

## 将軍塚

### 将軍塚の由緒

桓武天皇は都を奈良から京都の南方、長岡に移されましたが、いろいろと事故が続きました。この時、和気清麻呂は天皇をこの山上にお誘いし、京都盆地を見下ろしながら、都の場所にふさわしい旨進言しました。天皇はその勧めに従って延暦十三年(794年)、平安建都に着手されました。

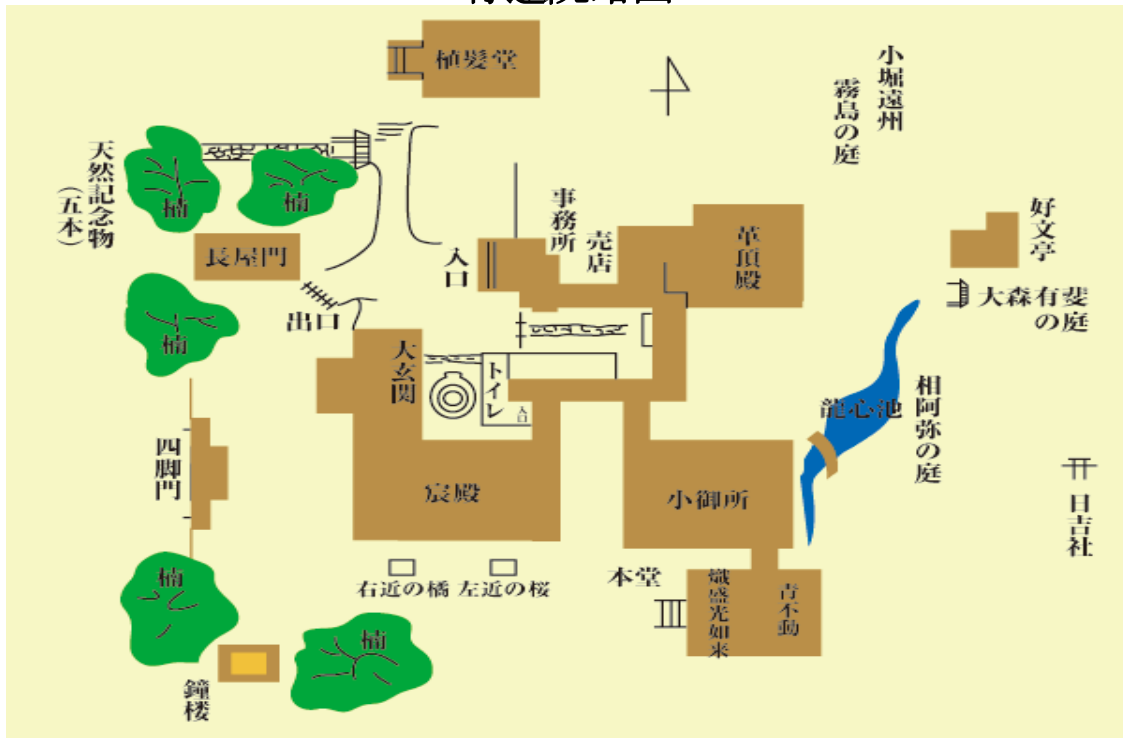
天皇は、都の鎮護のために、高さ2.5メートル程の将軍の像を土で作し、鎧甲を着せ鉄の弓矢を持たせ、太刀を帯させ、塚に埋めるよう命じられました。これが、この地を「将軍塚」と呼ぶ由来です。

この「将軍塚」は、国家の大事があると鳴動したという伝説が、源平盛衰記や太平記に残されています。また、延元年間(1338年頃)には新田義貞がここに陣を敷いて足利尊氏の軍を敗り、また近くは太平洋戦争にここが高射砲の陣地にもなりました。将軍塚は、「強者どもが夢の跡」でもあります。

近代では、東郷元帥、黒木大将、大隈重信、菊地大雪等のお手植えの松と石柱があり、往時の偉人達が訪れ、ここから京の都を一望して日本の将来に思いを馳せたことが偲ばれる場所です。



## 青蓮院略図



## 青不動19観

### \* 不動十九観の儀軌

1. 此の尊は大日の化身なり。
2. 明（真言）の中に阿（あ）、路（ろ）、喚（かん）、蔓（まん）の四字あり。
3. 常に火生三昧に住す。
4. 童子形を現じ、身、卑しくして肥満せり。
5. 頂に七莎髻あり。
6. 左に一弁髪を垂る。
7. 額に皺文あり、形、水波のごとし。
8. 左の一目を閉じ、右の一目を開く。
9. 下歯、上の右唇を喫み、下の左唇、外へ翻出す。
10. その口を緘閉す（閉じる）。
11. 右手に剣を執る。
12. 左手に索を持つ。
13. 行人の残食を喫す。
14. 大盤石に安坐す。
15. 色醜くして青黒なり。
16. 奮迅忿怒す。
17. 遍身に迦楼羅炎あり。
18. 変じて俱力迦大龍と成り剣に纏わる。
19. 変じて二童子と作り、給使す。

# 黄不動 三井寺

三井寺は、正式には「長等山園城寺(おんじょうじ)」といい、天台寺門宗の総本山です。平安時代、第五代天台座主・智証大師円珍和尚の卓越した個性によって天台別院として中興され、以来一千百余年にわたってその教法を今日に伝えてきました。

天台寺門宗(てんだいじもんしゅう)の総本山である三井寺(みいでら)は正式名称を長等山園城寺(ながらさんおんじょうじ)といいます。滋賀県大津市、琵琶湖南西の長等山中腹に広大な敷地を有しています。

また、湖国近江の名勝、近江八景の一つ「三井の晩鐘」でも知られています。

## 近江大津京

667年に天智天皇により飛鳥から近江に都が移され、近江大津京が開かれました。

672年、前年の天智天皇の永眠後、大友皇子(天智天皇の子:弘文天皇)と大海人皇子(天智天皇の弟:天武天皇)が皇位継承をめぐる争い、壬申の乱が勃発。壬申の乱に敗れた大友皇子の皇子の大友与多王は父の霊を弔うために「田園城邑(じょうゆう)」を寄進して寺を創建し、天武天皇から「園城」という勅額を賜ったことが園城寺の始まりとされています。

勝利をおさめた大海人皇子は再び飛鳥に遷都し、近江大津京はわずか五年で廃都となりました。

## 三井寺の名の起こり

三井寺と呼ばれるようになったのは、天智・天武・持統天皇の三帝の誕生の際に御産湯に用いられたという霊泉があり「御井の寺」と呼ばれていたものを後に智証大師円珍が当時の厳義・三部灌頂の法儀に用いたことに由来します。

現在、金堂西側にある「閼伽井屋」から湧き出ている清水が御井そのものとされています。

## 寺門派と山門派

貞観年間(859~877)になって、智証大師円珍(ちしょうだいしえんちん)和尚が、園城寺を天台別院として中興されてからは、東大寺・興福寺・延暦寺と共に「本朝四箇大寺(しかたいじ)」の一つに数えられ、南都北嶺の一翼を担ってきました。

円珍の死後、円珍門流と慈覚大師円仁門流の対立が激化し、正暦四年(993)、円珍門下は比叡山を下り一斉に三井寺に入ります。この時から延暦寺を山門、三井寺を寺門と称し天台宗は二分されました。

その後、両派の対立や源平の争乱、南北朝の争乱等による焼き討ちなど幾多の法難に遭遇しましたが、智証大師への信仰に支えられた人々によって支えられ、その教法は今日に伝えられています。

## 三井寺の秘仏

三井寺の本堂、金堂には、本尊として弥勒菩薩(みろくぼさつ)が祀られています。「寺門伝記補録」によると、身丈三寸二分の弥勒菩薩が祀られていることがわかりますが、絶対の秘仏となっているために見る事ができません。この弥勒菩薩は天智天皇の御念持仏と伝えられています。さらに、推古天皇、聖武天皇、陽成天皇、藤原鎌足、藤原道長、行基菩薩が奉納した六軀もの弥勒菩薩がお祀りされています。その他にも智証大師ゆかりの仏像や宝物が秘仏として大切に安置されています。

## 三井寺の黄不動

金色不動明王画像(黄不動尊)

- ・国宝 平安時代 九世紀
- ・絹本着色 縦178.2cm 横72.1cm

三井寺の黄不動は日本三不動の一つに数えられています。

三善清行撰の「天台宗延暦寺座主円珍伝」によると、承和五年(838)冬、山中にて修行中の円珍の目前に「魁偉奇妙(かいいきみょう)」な「金人(きんじん)」が出現し、円珍は直ちに画工に命じて写し取らせたといわれています。

これにちなむ黄不動画像はいくつか伝えられていますが、三井寺の最古本はその原本とされています。

胸に条帛(じょうはく)を着けず、天を向く二牙を持ち両目をカッと見開く図像は、まったく儀軌にあてはまらないものです。

隆起した筋肉質の体といい、足下に何も踏まない構想といい、いかにも虚空示現の伝説にふさわしいものです。

黄不動(きふどう)は、滋賀県大津市の園城寺(通称:三井寺)に秘仏として伝わる、全身が黄色の不動明王立像の仏画である。平安時代初期の9世紀の作で、国宝に指定されている。

円珍が感得した像を描いたものとされる。三不動の一であり、別名、金色不動明王。公開されていない。

京都・曼殊院等に伝わる多くの模写像は磐座上に立つが、本像は円珍が実際に感得した際のさまを表現しているため、虚空上に立つ姿を本紙いっぱい描いている。

また、背景も虚空の状景を表すため、何も描かれていない。不動明王を単独で描いた仏画としては現存最古の遺品である。

天台宗寺門派最高の厳儀とされる伝法灌頂の受者しか拝することが許されない秘仏とされる。印刷物などへの掲載も厳しく制限されている。

円珍は、比叡山や渡唐上でこの黄不動に再三感得し、身の危険を救われたとされると種々の伝承に伝わるが、その根幹になったのは、円珍が没して11年後の延喜2年(902年)、文章博士・三善清行が撰述した『天台宗延暦寺座主円珍和尚伝』にある一文である。

承和5年(838年)冬の昼、石龕で座禅をしていた円珍の目の前に忽然と金人が現れ、自分の姿を描いて懇ろに帰仰するよう勧めた(「帰依するならば汝を守護する」)。円珍が何者かと問うと、自分は金色不動明王で、和尚を愛するがゆえに常にその身を守っている答えた。

その姿は「魁偉奇妙、威光熾盛」で手に刀剣をとり、足は虚空を踏んでいた。円珍はこの体験が印象に残ったので、その姿を画工に銘じて写させたという。

この伝承通り承和5年(838年)頃の制作と見られていたが、同じ図様は空海が請来した図像に既に見られ、細部は円珍請来本の中で初めて見られることから、円珍が帰朝した後描かれたとする説が有力である。

本像はその聖性や神秘性から、後世しばしば模作された。現在、絵画作品がおおよそ20件、彫刻は6件ほど知られている。

## 【重要】西国三十三カ所観音霊場

巡礼の第十四番目の礼所である観音堂がある。

京都近郊の西国三十三カ所観音霊場

- 第10番札所・宇治・三室戸寺
- 第11番札所・醍醐・上醍醐寺(現在は下醍醐寺内)
- 第12番札所・大津・岩間寺
- 第13番札所・大津・石山寺
- 第14番札所・大津・三井寺
- 第15番札所・京都・今熊野観音寺(泉涌寺境内)
- 第16番札所・京都・清水寺
- 第17番札所・京都・六波羅密寺
- 第18番札所・京都・六角堂
- 第19番札所・京都・草堂
- 第20番札所・京都・吉峰寺
- 第21番札所・亀岡・穴太寺
- 第20番札所・茨木・総持寺

## 【補足】壬申の乱

壬申の乱(じんしんのらん)は、天武天皇元年6月24日 - 7月23日、(ユリウス暦672年7月24日 - 8月21日)に起こった古代日本最大の内乱である。

天智天皇の太子・大友皇子(弘文天皇の称号を追号)に対し、皇弟・大海人皇子(後の天武天皇)が地方豪族を味方に付けて反旗をひるがえしたものである。反乱者である大海人皇子が勝利するという、例の少ない内乱であった。

名称の由来は、天武天皇元年が干支で壬申(じんしん、みずのえさる)にあたることによる。

## 乱の原因

壬申の乱の原因として、いくつかの説が挙げられている。

### 皇位継承紛争

天智天皇として即位する前、中大兄皇子であったときに中臣鎌足らと謀り、乙巳の変といわれるクーデターを起こし、母である皇極天皇からの譲位を辞して軽皇子を推薦するが、その軽皇子が孝徳天皇として即位しその皇太子となるも、天皇よりも実権を握り続け、孝徳天皇を難波宮に残したまま皇族や臣下の者を引き連れ倭京に戻り、孝徳天皇は失意のまま崩御、その皇子である有間皇子も謀反の罪で処刑する。

また天智天皇として即位したあとも、旧来の同母兄弟間での皇位継承の慣例に代わって唐にならった嫡子相続制(すなわち大友皇子(弘文天皇)への継承)の導入を目指すなど、かなり強引な手法で改革を進めた結果、同母弟である大海人皇子の不満を高めていった。

当時の皇位継承では母親の血統や后妃の位も重視されており、長男ながら身分の低い側室の子である大友皇子の弱点となっていた。

これらを背景として、大海人皇子の皇位継承を支持する勢力が形成され、絶大な権力を誇った天智天皇の崩御とともに、それまでの反動から乱の発生へつながっていったとみられる。

## 【補足】乙巳の変＝蘇我入鹿暗殺事件

乙巳の変(いっしのへん、おっしのへん)は、中大兄皇子、中臣鎌足らが宮中で蘇我入鹿を暗殺して蘇我氏(蘇我本宗家)を滅ぼした飛鳥時代の政変。

その後、中大兄皇子は体制を刷新して大化の改新と呼ばれる改革を断行した。俗に蘇我入鹿が殺された事件のことを指して「大化の改新」と言うこともあるが、厳密にはクーデターである「乙巳の変」の後に行われた一連の政治改革が「大化の改新」である。

## 【補足】

天智天皇は百濟系、天武天皇は新羅系。兄弟では無い。天武は天智より4歳年上。

# 赤不動

## 高野山。明王院。

明王院(みょうおういん)は、和歌山県高野町の高野山真言宗の寺院。高野山のなかほど本院谷に所在。日本三不動のひとつ「赤不動」として知られる。

寺伝によれば弘仁7年(816年)、空海(弘法大師)が高野山を開くにあたり、自ら刻んだ五大明王を安置し開創したという。

本堂の内陣は左右に分かれており、向かって右には本尊「赤不動」、脇仏弘法大師像で、左には後醍醐天皇画像。左の内陣は不動明王立像による護摩壇になっている。

絹本着色不動明王二童子像 — 通称「赤不動」。園城寺を開いた円珍作と伝えられるが、実際の制作は鎌倉時代と推定される。後醍醐天皇が守り本尊として吉野に逃れる際にも所持したという。明王院開創当初の本尊五大明王像の焼失後、当寺に本尊として祀られている。京都・青蓮院の「青不動」、滋賀・園城寺の「黄不動」とともに日本三不動の一とされる。通常は非公開であるが4月28日の赤不動大祭で開帳される。

本尊の赤不動明王は、いわゆる感得像で、赤い身色の不動明王を二童子と共に描いた画幅です。弘法大師の甥に当たられる方で、後に天台の座主にもなられる智証大師円珍和尚が、修行中に感得した不動明王の姿を、その余りの有り難さに自分の頭を岩に打ち付け、岩絵の具に頭血を混ぜて写しとられたと言われています。

赤不動明王は平安の昔より庶民に尊崇され厚い信仰を集めていたようです。例えば平安・戦国・江戸太平の頃…と高野山への帝・皇族・貴顕紳士の御登山は数多ありますが、明治維新以降、廃仏の嵐の中も不動尊信仰の濤は世に息むこと無く、天皇皇后両陛下をはじめ、各宮家や多くの華族が赤不動明王に礼拝供養されました。

多くの信仰を集めた赤不動明王ですが、特に有名な挿話としては、後醍醐天皇との深い縁があります。後醍醐帝は、密教への崇信深く、灌頂を授かり加持祈禱を能くしたみかどとしても高名ですが、特に赤不動さまを守り本尊として厚く信仰され、吉野へも御籠の道中を共にされたと伝えられています。その後南朝の終わり頃、戦火に喪われることがあつてはいけないと後醍醐帝によって高野山に移されました。爾来今日まで、法燈絶えざる赤不動の寺として世に知られています。

## 天台宗について

日本の天台宗は、中国の天台宗に加えて密教、浄土教、禅などのいろいろな要素を取り入れた宗派です。

比叡山は総合大学のように、それらのいろいろな流れを学問として教えていて、そこで学んでいる僧がどれを学んだか、どれが気に入ったかによって、各宗派が独立していったと考えられます。

法華宗としての天台宗を発展させた円仁・円珍や、密教を発展させた安然などの流れが、現在の台密としての天台宗につながります。

「往生要集」を書いた源信は、比叡山の学問の中の浄土教に傾倒し、浄土教の思想を発展させました。100年ほど後になって、良忍によって称名念仏を中心とした**融通念仏宗**が天台宗から独立しました。

融通念仏宗はまだ天台宗の浄土教に近いものでしたが、その後の法然によって思想的にも天台宗とは独立した**浄土宗**が開かれます。

**浄土真宗**・開祖親鸞は天台宗でも浄土教を学んでいるのですが、それよりも法然と出会うことによって、その教えに帰依したので、天台宗の影響は大きくないのではないのでしょうか。

**時宗**・開祖一遍も天台宗で得度しているのですが、13歳くらいで浄土宗に移っています。当時の寺院の多くが天台宗だったからとりあえずそこに入って、実際に仏教を学んだのはほとんど浄土宗でしょう。

天台宗においても禅定は行われていましたが、特に禅を重視して天台宗から独立して**達磨宗**を開いたのが能忍です。

**臨済宗**・開祖栄西も天台宗の中で禅を学びましたが、平安初期に伝えられたままの天台禅や達磨宗には満足できず、宋に渡って中国の禅を伝えました。その後、臨済宗では宋へ留学したり、宋から招いたりした多くの僧によって多くの派が生まれました。

**曹洞宗**・開祖道元も最初は天台宗に属していましたが、10代のうちに臨済宗に入っているのです、ほぼ始めから禅宗の僧と考えてもいいかも知れません。

天台宗は法華経を根本経典として重視していましたが、それ以外の教えも広く学んでいたのに対し、法華経だけを絶対的に崇拝したのが**日蓮宗**・日蓮です。日蓮は天台宗だけでなく真言宗も学びましたが、結局法華経以外のいろいろな思想は全て退けてしまいました。

南都六宗については、現在残っているのは**華嚴宗**、**法相宗**、**律宗**ですが、法相宗から独立した北法相宗、聖徳宗もあって、一応平安二宗とは別系統です。

## 【修学旅行生対応】

### 晴明神社

晴明神社(せいめいじんじゃ)は、京都市上京区にある神社である。安倍晴明を祀る。一条戻橋のたもと(北西)にあった晴明の屋敷跡に鎮座する。全国各地に同名の神社が存在する。

### 歴史

1005年に晴明が亡くなると、その時の天皇一条天皇は晴明の遺業を賛え、晴明は稲荷神の生まれ変わりであるとして、1007年、その屋敷跡に晴明を祀る神社を創建した。当時の境内は、東は堀川通り、西は黒門通り、北は元誓願寺通り、南は中立売通りまであり、かなり広大であった。

しかし度重なる戦火や豊臣秀吉の都市整備などにより次第に縮小し、社殿も荒れたままの状態となった。幕末以降、氏子らが中心となって社殿・境内の整備が行われ、1950年には堀川通に面するように境内地が拡張された。

平成になると、漫画化・映画化もされた夢枕獏の小説のヒットにより、主人公である安倍晴明のブームが起こり、全国から参拝者が訪れるようになった。晴明歿後千年となる2005年には安倍晴明千年祭が行われた。

2017年に二の鳥居の社号額が新調され、1854年(安政元年)に土御門晴雄により奉納されたものを忠実に再現したものとなった。

### 晴明井

本殿の北には、晴明井といわれる井戸があり、ここから湧く水は晴明水と呼ばれ、晴明の陰陽道の霊力より、湧き出たといわれ、無病息災のご利益があるといわれている。

伝承によれば千利休が茶会において、この井戸から汲んだ水を沸かし、茶の湯として利用していたといわれ、豊臣秀吉もその茶を服されたと伝えられている。

この井戸は五芒星(晴明紋)を描き、その取水口がその星型の頂点の一つにあり、立春には、晴明神社の神職がその晴明井の上部を回転させ、その年の恵方に取水口を向けるのが、慣わしとなっている。

### 安倍晴明

安倍 晴明(あべのせいめい/はるあき/はるあきら、延喜21年1月11日[1]〈921年2月21日〉 - 寛弘2年9月26日〈1005年10月31日〉)は、平安時代の陰陽師。「晴明」を「せいめい」と読むのは有職読みであり、本来の読み方は確定していない。鎌倉時代から明治時代初めまで陰陽寮を統括した安倍氏(土御門家)の祖。官位は従四位下・播磨守。



## 陰陽師

陰陽師(おんみょうじ、おんようじ)は、古代日本の律令制下において中務省の陰陽寮に属した官職の1つで、陰陽五行思想に基づいた陰陽道によって占筮(せんぜい)及び地相などを職掌とする方技(技術系の官人。技官)として配置された者を指すが、それら官人が後には本来の律令規定を超えて占術など方術や、祭祀を司るようになったために陰陽寮に属する者全てを指すようになり、更には中世以降の民間において個人的に占術等を行う非官人の者をも指すようになり、声聞師と重ねられることもあって「声聞師」と呼ばれる場合もあった。中・近世においては民間で私的祈祷や占術を行う者を称し中には神職の一種のように見られる者も存在する。

## 陰陽五行思想の伝来と陰陽寮の発足

陰陽師は全ての事象が陰陽と木・火・土・金・水の五行の組み合わせによって成り立っているとする夏、殷(商)王朝時代にはじまり周王朝時代にはほぼ完成した中国古代の陰陽五行思想に立脚し、これと密接な関連を持つ天文学、暦学、易学、時計等をも管掌した日本独自の職であるが、前提となる陰陽五行思想自体は飛鳥時代、遅くとも百済から五経博士が来日した継体天皇7年(512年)または易博士が来日した欽明天皇15年(554年)の時点までに、中国大陸(南北朝またはそれ以前)から直接、または朝鮮半島西域(高句麗・百済)経由で伝来したと考えられている。

## 白峯神宮

白峯神宮(しらみねじんぐう)は、京都府京都市上京区にある神社である。配流されてその地で歿した崇徳天皇・淳仁天皇を祀る。旧名白峯宮。旧・社格は官幣大社。

白峯神宮の社地は、蹴鞠の宗家であった堂上家(公家)・飛鳥井家の屋敷の跡地である。

摂社の地主社に祀られる精大明神は蹴鞠の守護神であり、現在ではサッカーのほか、球技全般およびスポーツの守護神とされ、サッカーをはじめとするスポーツ関係者の参詣も多く、社殿前にはサッカーやバレーボールの日本代表チームや、Jリーグに所属する選手などから奉納されたボールなどが見られる。スポーツにちなんだお守りが有名で、叶う輪(かなうわ)という縁起物がある。

## 崇徳上皇(後に明治帝により天皇として即位)

保元の乱により讃岐へ配流される。配流先で5つの写経を完成させ京の寺に奉納させてくれと依頼するが呪詛が込められているのではないかと疑われ奉納を拒否される。

これに怒った崇徳院は大いに恨み、「日本国の大魔縁となり、皇を取って民とし民を皇となさん」「この経を魔道に回向(えこう)す」と血で書き込み、爪や髪を伸ばし続け夜叉のような姿になり、後に生きながら天狗になったとされている。後に怨霊となり京に多大なる災害が起こる。

明治天皇は慶応4年(1868年)8月18日に自らの即位の礼を執り行うに際して勅使を讃岐に遣わし、崇徳天皇の御霊を京都へ帰還させて白峯神宮を創建した。

# 暦のうんちく

## 日本の暦の確定

『大和暦』(貞享暦)の確定。安井算哲。江戸時代前期の囲碁棋士で天文暦学者の渋川春海。

古代から江戸時代初期までは、各時代の中国暦を輸入したものが使われていた(宣明暦以降は輸入が途絶え、そのまま使っていた)。江戸期において、西洋暦も参考にした日本人による暦が作られ始めた。明治改暦により、グレゴリオ暦 1873 年(明治 6 年)1 月 1 日からはグレゴリオ暦が使われ 2017 年(平成 29 年)現在に至っている。

元嘉暦(げんかれき) - 6 世紀頃朝鮮半島の百濟から伝えられた宋の時代の中国暦である。

儀鳳暦(ぎほうれき) - 中国暦で 690 年から元嘉暦と併用された。697 年からは単独で使用された。

大衍暦(たいえんれき、だいえんれき) - 中国暦で 764 年から 861 年まで使われた。

五紀暦(ごきれき) - 中国暦で 781 年に日本に紹介されたが単独で使われることはなかった。

宣明暦(せんみょうれき) - 中国暦で 862 年から 1685 年まで使用された。

ここまでの暦では中国基準の暦で蝕が正確に観測できなかった。(蝕を正確に予測できなかった)。理由 = 観測地点の緯度経度の違いが天文観測にあらわされていなかった。

**貞享暦(じょうきょうれき)** - 初めて日本人(安井算哲。)により編纂された暦で 1685 年から 1755 年まで使われた。この暦でもって初めて日本で蝕が正確に観測されるようになった。映画「天地明察」参照。

宝暦暦(ほうりゃくれき、ほうれきれき) - 1755 年から 1798 年

寛政暦(かんせいれき) - 1798 年から 1844 年

天保暦(てんぼうれき) - 1844 年から 1872 年

明治改暦により、グレゴリオ暦 1873 年(明治 6 年)1 月 1 日からはグレゴリオ暦が使われ 2017 年(平成 29 年)現在に至っている。

## グレゴリオ暦

グレゴリオ暦(グレゴリオれき、羅: *Calendarium Gregorianum*、伊: *Calendario gregoriano*、英: *Gregorian calendar*)は、ローマ教皇グレゴリウス 13 世がユリウス暦の改良を命じ、1582 年 10 月 15 日(グレゴリオ暦)から行用されている暦法である。現行太陽暦として世界各国で用いられている。グレゴリオ暦を導入した地域では、ユリウス暦に対比して新暦(ラテン語: *Ornatus*)と呼ばれる場合もある[1]。紀年法はキリスト紀元(西暦)を用いる。

グレゴリオ暦の本質は、平年では 1 年を 365 日とするが、400 年間に(100 回ではなく)97 回の閏年を置いてその年を 366 日とすることにより、400 年間における 1 年の平均日数を、 $365 + (97/400)$ 日 = 365.2425 日、とすることである。この平均日数 365.2425 日は、実際に観測で求められる平均太陽年(回帰年)の 365.242189572 日(2013 年年央値)に比べて 26.821 秒だけ長いだけであり、ユリウス暦に比べると格段に精度が向上した。

日本では 1872 年(ほぼ明治 5 年に当たる。)に採用され、明治 5 年 12 月 2 日(旧暦)の翌日を明治 6 年 1 月 1 日(新暦)(グレゴリオ暦の 1873 年 1 月 1 日)とした。

## 六曜

六曜(ろくよう、りくよう)は、暦注の一つで、先勝・友引・先負・仏滅・大安・赤口の6種の曜がある。日本では、暦の中でも有名な暦注の一つで、一般のカレンダーや手帳にも記載されていることが多い。今日の日本においても影響力があり、「結婚式は大安がよい」「葬式は友引を避ける」など、主に冠婚葬祭などの儀式と結びついて使用されている。なまさ六輝(ろつき)や宿曜(すくよう)ともいうが、これは七曜との混同を避けるために、明治以後に作られた名称である。

## 節句

暦の節目は節句となっている。

- 1月7日 - 人日(じんじつ)、七草
- 3月3日 - 上巳(じょうし/じょうみ)、桃の節句
- 5月5日 - 端午(たんご)、端午の節句
- 7月7日 - 七夕(しちせき/たなばた)
- 9月9日 - 重陽(ちょうよう)、菊の節句

## 国民の祝日 (16日ある。)

国民の祝日は国民の祝日に関する法律(祝日法)で規定している。

- 1月1日 - 元日(1948年より)
- 1月の第2月曜日 - 成人の日(2000年より。それ以前は1月15日(1948年より))
- 2月11日 - 建国記念の日(1966年より)
- 3月21日頃 - 春分の日(1948年より)
- 4月29日 - 昭和の日(2007年より。それ以前はみどりの日(1989年より)さらにそれ以前は天皇誕生日(1948年より))
- 5月3日 - 憲法記念日(1948年より)
- 5月4日 - みどりの日(2007年より)
- 5月5日 - こどもの日(1948年より)
- 7月の第3月曜日 - 海の日(2003年より。それ以前は7月20日(1995年より))
- 8月11日 - 山の日(2016年より)
- 9月の第3月曜日 - 敬老の日(2003年より。それ以前は9月15日(1966年より))
- 9月23日頃 - 秋分の日(1948年より)
- 10月の第2月曜日 - 体育の日(2000年より。それ以前は10月10日(1966年より))
- 11月3日 - 文化の日(1948年より)
- 11月23日 - 勤労感謝の日(1948年より)
- 12月23日 - 天皇誕生日(1989年より)

春分の日と秋分の日の日付は、前年2月1日の官報で発表される。

## 二十四節気

中元と盆を除いて、日付は年により前後する。

- 1月5日 - 小寒(しょうかん)、寒の入り(かんのいり)
- 1月17日 - 冬の土用(どよう)
- 1月20日 - 大寒(だいかん)
- 2月3日 - 節分(せつぶん)
- 2月4日 - 立春(りっしゅん)
- 2月19日 - 雨水(うすい)
- 3月6日 - 啓蟄(けいちつ)
- 3月16日 - 春の社日(しゃにち)
- 3月18日 - 春彼岸(はるひがん)
- 3月21日 - 春分(しゅんぶん)
- 4月5日 - 清明(せいめい)
- 4月17日 - 春の土用(どよう)
- 4月20日 - 穀雨(こくう)
- 5月2日 - 八十八夜(はちじゅうはちや)
- 5月6日 - 立夏(りっか)
- 5月21日 - 小満(しょうまん)
- 6月6日 - 芒種(ぼうしゅ)
- 6月11日 - 入梅(にゅうばい)
- 6月21日 - 夏至(げし)
- 7月2日 - 半夏生(はんげしょう)
- 7月7日 - 小暑(しょうしょ)
- 7月15日 - 中元(ちゅうげん)、盆(ぼん)
- 7月20日 - 夏の土用(どよう)
- 7月23日 - 大暑(たいしょ)
- 8月8日 - 立秋(りっしゅう)
- 8月23日 - 処暑(しょしょ)
- 9月1日 - 二百十日(にひゃくとおか)
- 9月8日 - 白露(はくろ)
- 9月11日 - 二百二十日(にひゃくはつか)
- 9月20日 - 秋彼岸(あきひがん)
- 9月22日 - 秋の社日(しゃにち)
- 9月23日 - 秋分(しゅうぶん)
- 10月8日 - 寒露(かんろ)
- 10月20日 - 秋の土用(どよう)
- 10月23日 - 霜降(そうこう)
- 11月7日 - 立冬(りっとう)
- 11月22日 - 小雪(しょうせつ)
- 12月7日 - 大雪(たいせつ)
- 12月22日 - 冬至(とうじ)

## 琵琶湖疎水（京都疎水）

京都にとって琵琶湖の水を引くことは昔からの夢でした。第3代京都府知事となった北垣国道は、明治維新による東京遷都のため沈みきった京都に活力を呼び戻すため、琵琶湖疎水の建設を取り上げました。疎水の水力で新しい工場を興し、舟で物資の行き来を盛んにしようという計画です。

福島県の安積疎水の主任技師南一郎平に琵琶湖疎水計画の調査を依頼し、大津京都間の測量を島田道生に命じ、東京の工部大学校を卒業したばかりの田邊朔郎を土木技師に採用するなどの準備を進めました。

予算の原案は当時のお金で60万円でしたが、政府からもっと念入りな工事をするようにとの意見が出て、工事予算は125万円になりました。議会は市民に税金を掛けてでも計画を進めると決定し、明治18(1885)年に着工しました。

第1トンネルは長さが2,436メートルもあり、完成を危ぶむ人が多く難工事でした。わが国で初めて堅坑利用による工法を採用し、れんが、材木も直営で生産し、ほとんど人力だけで工事をしました。

琵琶湖疎水は着工から5年後の明治23(1890)年に完成しましたが、水力発電を採用したおかげで、新しい工場が生まれ、路面電車も走り出し、京都は活力を取り戻しました。それから20年後、更に豊かな水を求めて第2疎水を建設し、同時に水道と市営電車を開業したことで、今日の京都のまちづくりの基礎ができあがったのです。

琵琶湖疎水は今も京都に琵琶湖の水を供給し続けています。  
琵琶湖疎水はまさしく京都に命の水をもたらしてくれているのです。

当時、市の年間予算の十数倍という膨大な費用を投入した大事業の主任技師として北垣知事に選ばれたのが、工部大学校(現在の東京大学)を卒業したばかりの青年技師田邊朔郎(採用当時は満21才)でした。

日本人の技術で行う土木工事としては、今までに例を見ない大工事であり、当時の未発達な土木技術や貧弱な機械・材料に悩まされながら工事を進めました。工事の遂行に当たっては、ダイナマイトとセメント以外の大半の資材を自給自足し、夜に技術者を養成、昼には実践するという現代ではおよそ想像もつかない努力の積み重ねでした。

疎水計画は着工前後に何度も変更されましたが、最も大きな変更は、工事の途中で田邊朔郎ほか水の利用方法等について米国へ視察に行き、水力発電の実用化に踏み切ったことです。明治24年、蹴上に日本最初の商業用水力発電所が稼働したことは、我が国文明史に大きな足跡を残しています。

第1疎水の流量は毎秒8.35立方メートル(300立方尺)で、大津市三保ヶ崎の取水点から長等山をトンネルで抜け、山科北部の山麓をめぐり蹴上に出て、蹴上から約36メートルの落差をインクライン(傾斜鉄道)で下って鴨川に至り、鴨川合流点から下流は鴨川左岸、深草、伏見を経て濠川に出ます。また、途中には舟運のために閘門が各所に設けられました。

特に、第1トンネル(長等山のトンネル)は、当時我が国最長のもので多くの人達はその成功を疑いましたが、山の両側から掘っていくほかに、山の上から垂直に穴を掘りそこから山の両側に向けて工事を進めていく豎坑(シャフト)方式を我が国で初めて採用し、工事の促進を図りました。

この難関であった第1トンネルの開通により、関係者は疏水事業の成功を確信したのです。

竣工式は明治23年4月9日疏水本線が鴨川に合流する少し東の夷川船溜で行われ、その前日の竣工夜会では、市内各戸に日の丸と提灯が揚げられ、船溜南側に祇園祭りの月鉾、鶏鉾、天神山、郭巨山が並び、如意岳の大文字も点火され、付近は人出で埋まり、盆と正月が一緒にきたほどの賑やかさと報道されており、市民の喜びがいかにか大きかったかを物語っています。

水力発電は疏水起工時の諸目的の他に、主として工業動力に振り向けられ、紡績、伸銅、機械、タバコ等の新しい産業の振興に絶大な能力を発揮し、京都市発展の一大原動力となりました。そして、明治28年には我が国最初の路面電車(京都駅～伏見)が開通しました。

また、明治36年には第3トンネル入口に日本最初の鉄筋コンクリート橋が完成しました。

疏水工事(第1疏水の天津～鴨川及び疏水分線)の費用は総額で125万円余りを要し、その財源には産業基金、国、府補助金、市公債などのほか、特別に全市民に課税された目的税も充当され、疏水工事にかけた市民の期待がうかがわれます。

## ロシア皇太子暗殺事件・大津事件

大津事件(おおつじけん)は、1891年(明治24年)5月11日に日本を訪問中のロシア帝国皇太子・ニコライ(後のニコライ2世)が、滋賀県滋賀郡大津町(現大津市)で警備にあたっていた警察官・津田三蔵に突然斬りつけられ負傷した暗殺未遂事件である。

当時の列強の一つであるロシア帝国の艦隊が神戸港にいる中で事件が発生し、まだ発展途上であった日本が武力報復されかねない緊迫した状況下で、行政の干渉を受けながらも司法の独立を維持し、三権分立の意識を広めた近代日本法學史上重要な事件とされる。裁判で津田は死刑を免れ無期徒刑となり、日本政府内では外務大臣・青木周蔵と内務大臣・西郷従道が責任を負って辞職し、6月には司法大臣・山田顕義が病気を理由に辞任した。

## ニコライ二世

ニコライ2世は、ロマノフ朝第14代にして最後のロシア皇帝(在位1894年11月1日 - 1917年3月15日)。

日露戦争・第一次世界大戦において指導的な役割を果たすが、革命勢力を厳しく弾圧したためロシア革命を招き、1918年7月17日未明にエカテリンブルクのイパチェフ館において一家ともども虐殺された。東ローマ帝国の皇帝教皇主義の影響を受けたロシアにおいて、皇帝は宗教的な指導者としての性格も強いため、正教会の聖人(新致命者)に列せられている。

## 大津百町

大津の中心市街地、いわゆる「大津百町」は、東海道の逢坂峠を越えて、琵琶湖に向かって東西に町が広がっています。江戸時代になると、琵琶湖水運の港町、東海道五十三次の宿場町、そして三井寺の門前町として発展しました。町家とは町人の職住一体型の都市住宅ですが、このような大津百町をはじめとする大津市内にある町家を「大津町家」と称しています。

大津百町エリアには、江戸時代末期から戦前までに建てられた町家など伝統的な建築物が多く残っています。

## 大津百町館

江戸時代、東海道の宿場町として栄えた大津は、百余の町が集まり様々な物と人が行き交ったことからその賑わいぶりが“大津百町”と呼ばれ、商人たちは町家を舞台に活躍をみせました。

平成13年6月、大津の町家活用や保存などを考える場所、当時の町家文化を見学できる唯一の施設として大津百町館が誕生しました。

来館者への案内や館の管理は“大津の町家を考える会”のボランティアメンバーで運営されており、オープン以後、個人や市民グループなどによる展覧会、講演会、フォーラム、文化教室など市民や観光客の交流の場、町家やまちなかについての学習の場として活躍しています。

建物は木造2階建て、明治32年生まれ(築百年以上)の表屋造りの町家で、母屋・蔵・離れと中庭で構成されています。

入口には、古き大津の暮らしを写し出した写真や、大津百町おもしろ発見地図などの掲示物、大津のまちの模型が展示されています。

暖簾をくぐり、一歩中に足を踏み入れると、まるでタイムスリップしたかのような趣のある光景。高い天井に太い梁、ほぼ昔のままの台所には、つるべ式井戸やおくどさんが残されており、この玄関土間を抜けると大広間が広がります。広間の横には風情ある坪庭があり、さらにその向こうに離れが見えます。

奥に入れば入るほど、町家の特徴が随所に見られるこの空間の見応えは、表から見る印象をはるかに超えるものがあり、一度中を覗くと驚かれる方も多いと思います。

大津の町家文化継承の地で、ぜひ百年前の空気を体感してみてください。  
※入館は無料ですが、不定休ですので事前にお問合せをして来館されるのがおすすめです。  
TEL:077-527-3636(大津の町家を考える会)

## 近江神宮

第38代天智天皇をまつる近江神宮は、天智天皇、近江大津宮(大津京)跡に鎮座する神社。

近江神宮(おうみじんぐう)は、滋賀県大津市に鎮座する神社。皇紀2600年を記念して同年に相当する1940年(昭和15年)に創祀された。

滋賀県西部の大津市中心部にほど近い、琵琶湖西岸の山裾にあります。旧官幣大社・勅祭社で、社殿は近江造り・昭和造りといわれ、近代神社建築の代表として登録文化財となっています。

開運へのみちびきの神、産業文化学問の神として崇敬が深く、また漏刻(水時計)・百人一首かるた・流鏝馬(やぶさめ)で知られ、境内に時計館宝物館があり、漏刻・日時計なども設けられています。

天智天皇6年(667年)に同天皇が当地に近江大津宮を営み、飛鳥から遷都した由緒に因み、紀元2600年の佳節にあたる1940年(昭和15年)の11月7日、同天皇を祭神として創祀された。

終戦直後には、神道指令が発令された1945年(昭和20年)12月15日のまさにその当日に、戦後復興を祭神(天智天皇)に祈願した昭和天皇の勅旨により、同神宮は勅祭社に治定された。

例祭は大津宮に遷都された記念日の4月20日に勅使が参向して行われる。このほか主な祭典として、6月10日時の記念日の漏刻祭、7月7日(年により5日)の燃水祭、11月7日の御鎮座記念祭、12月1日(年により2日)の初穂講大祭、1月前半の日曜日のかるた祭(かるた開きの儀)などが行われる。

また、日本古式弓馬術協会による武田流鎌倉派流鏝馬神事が11月3日に行われていたが、平成27年から6月第1日曜日に変更された。

天智天皇が日本で初めて水時計(漏刻)を設置した歴史から境内には各地の時計業者が寄進した日時計や漏刻などが設けてあり、時計館宝物館と近江時計眼鏡宝飾専門学校が境内に併設されている。

また、『小倉百人一首』の第1首目の歌を詠んだ天智天皇にちなみ、競技かるたのチャンピオンを決める名人位・クイーン位決定戦が毎年1月に行われている。

このほかにも高松宮記念杯歌かるた大会・高校選手権大会・大学選手権大会なども開催されるなど、百人一首・競技かるたとのかかわりが深い。競技かるたに取材した漫画・アニメ『ちはやふる』の舞台ともなった。

天智天皇の百人一首の歌の歌碑も設置され、柿本人麻呂・高市黒人の万葉歌碑、弘文天皇(大友皇子)の御製漢詩碑、芭蕉句碑、保田與重郎の歌碑など多くの歌碑・句碑が作られている。



## ちはやふる

「ちはやふる」とは、競技かるたで使われている百人一首の中の一つの句の初めの5文字です。百人一首とは、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて活動した公家、藤原定家(ふじわらのていか)が選んだ和歌をまとめたもので、一人一首ずつ選んで作った和歌集です。行ってみれば、80年代ベスト盤みたいなものですね。その中にあるひとつの句が、

「ちはやふる 神代(かみよ)も聞(き)かず 竜田川(たつたがわ)  
からくれないに 水(みず)くくるとは」

です。この和歌を詠んだ人は、在原業平(ありわらのなりひら)。昔から、イケメン、プレイボーイの代名詞として言われてきた人です。そして、この句の意味は、それぞれを分解すると、

「ちはやふる」は、「(い)ち=激しい勢いで」「はや=すばやく」「ふる=ふるまう」

「神代も聞かず」は、「神代=大昔の神々の時代」「聞かず=聞いたことがない」

「竜田川」は、奈良県生駒郡斑鳩町田竜田にある川で、紅葉の名所。

「からくれないに」は、「から=唐土(中国)や韓の国(韓国)からやってきた凄いものにつける言葉」

「くれないに=紅」 「水くくるとは」は、「くくる=くくり染め、しぼり染めにする」

そして合わせると、

「すごく色々な事が起きていた太古の昔の神様の時代でさえ、聞いたことがありませんでした。竜田川がこれほど、うつしく紅色に染まるということを」

という意味になります。一見すると、風景を描写しているように見えますが、熱烈な恋愛関係にあった女性に対して贈った歌だと言われています。どういうことかということ、作者が好きだった女性が、清和天皇というひとに嫁に行ってしまうんですが、「まだ私はあなたの事をすきですよ」と、暗にほのめかしている歌だと言うのです。

## 全国高等学校小倉百人一首かるた選手権大会

毎年7月下旬に、滋賀県大津市の近江神宮で行われています。通称、かるた甲子園。1979年から行われていて、2015年は、暁星高校(東京都)で、8年連続10回目の優勝でした。ちなみに、1979年(第1回)は富士高校(静岡県)で、第10回まで、10連覇しています。

第39回大会(29年度)団体戦結果

優勝校 福島県代表 安積黎明高等学校(初優勝)

準優勝校 東京都代表 白鷗高等学校

三位校 滋賀県代表 膳所高等学校

四位校 群馬県代表 高崎女子高等学校

第38回大会(28年度)団体戦結果

優勝校 東京都 私立 暁星高等学校

準優勝校 大分県 県立 中津南高等学校

三位校 滋賀県 県立 膳所高等学校

四位校 富山県 県立 高岡高等学校

## 時計館宝物館

わが国の時刻制度は、今をさかのぼること1350年の昔、天智天皇の御代に大津の都に漏刻(ろうこく)を設置され時間を知らされた御事績に始まります。

漏刻とは水時計のことであり、日本書紀には、初めて漏刻を用い鐘鼓を鳴らして時を知らされた、と記録され、時の記念日の由来ともなりました。

昭和38年、近江神宮時計博物館は、わが国最初の時計博物館として、日本の時刻制度発祥の地に設けられました。平成22年4月、近江神宮御鎮座70年を期して改装し、「時計館宝物館」として新装開館、その後、27年に屋根の銅板を葺き替えました。

1階の時計館には高松宮家(有栖川宮家伝来)から御下賜されたわが国最古級の懐中時計や、各種の和時計をはじめ古今東西の時計、2階の宝物館には曾我蕭白「楼閣山水図屏風」(重要文化財 展示品は複製)や河井寛次郎の陶器、刺繍で織った百人一首織かるたなど、御鎮座以来各界の方々から奉納いただいた各種の品々を展示しています。

このほか、近江神宮では、崇福寺跡、南滋賀町廃寺跡の出土品を所蔵していますが、崇福寺跡出土舍利容器(国宝)は京都国立博物館、南滋賀遺跡出土白磁水注(重要文化財)は東京国立博物館、このほかの遺跡出土品(大津市指定文化財)は大津市歴史博物館に寄託しています。

### 垂揺球儀(すいようきゅうぎ)

寛政の初めに製作された我が国独自の振り子式天文時計。国内では5基確認されているが、当館の垂揺球儀は、完全な形態で現存する唯一のものである。重りのエネルギーによって振子を振動させ、歯車を回して振動数を計測、表示する。100万回程度の振動数を計測することができる。江戸中期の天文学者・間重富(はざま しげとみ)の考案になり、戸田忠三郎忠行の製作。天体観測のために定時法の精密な時刻を知るために用いられた。下の部分は不定時法により尺時計として用いられた。

### 櫓時計(やぐらどけい)

大名時計ともいう。動力には、重錘(おもり)を使用する。機械体は高い櫓の上であり、下に重錘が下っている。一番上の錘は、時報と目覚用ベルを兼ねており、各時刻に各々の数を打って刻を知らせる。テンプの錘の位置を半月ごとに(二十四節気ごとに)変えることにより、不定時法による時刻に対応させる。

### 漏刻(ろうこく)

三層に分かれた枡より漏れ落ちる水の量により時間を計るわが国最初の時計。落ちてくる水によって矢が浮き上がり、矢に付けた目盛により時間を知る。古代のエジプトや中国でも用いられたが、日本では天智天皇が初めて造られたと日本書紀に記される。近江朝より平安朝末期まで全国の国府・鎮守府などに置かれ時間を知らせた。近江神宮の漏刻は昭和39年オメガ社総代理店のシイベルヘグナー社により奉納されたもの。

### 香時計(こうどけい)

香炉の灰の中に香を鉤型に幾重にも埋め、香の燃焼の長さにより時刻を計る。香は合歡(ねむ)の木の若葉を粉にして使用する。香炉盤、自香盤、抹香時計ともいう。